

「理趣経曼荼羅図」拾遺

美術工芸研究室

本図については、かつて「大和文化研究」7巻5号で図版を紹介し、さらに思想的背景については「密教文化」63号でその一端を論じた事がある。しかし、一見して容易に理解されるようにその全面的な剥落、とくにその中央部は一部の尊容すらも全く判じ難い状態であつて、本図に関する具体的な事は理解できなかつたので、本年、赤外線・X線・紫外線を利用して本図の解明に努力してみた。

第1図 高野山天徳院蔵「理趣経曼荼羅図」

8	9	10	11	12
7				13
6				14
5				15
4	3	2	17	16

第2図 本図諸段配置順序

界成身会曼荼羅の系統をひく、所謂、五部具会の曼荼羅である。この2例のみから考えても外縁の16の曼荼羅が理趣経と密接な関連にたつものである事は容易に推察されよう。前述の三兄弟集会品の曼荼羅

ところが、近年の修理の際に顔料が大半失われたため、期待していた程の成果は得られず、全ては新資料の出現に委ねられたのであるが、前記の三つの方法の中では最も効果的であつた赤外線写真の報告と理趣経曼荼羅図についての私の考えをここに述べてみる事にしたい。勿論、まだ満足すべき結論を得たわけではないが、少しでも研究者の関心をひけば幸いだと思つている。

中央部の一会はさておいて、その周囲に配された種子曼荼羅は十六会もあり、それぞれが独自の形式をもつている。即ち、左辺中央の一会は半月輪を背後にして3字より出ださず、下段左方は一大月輪中に5個の小月輪をおき、その各々に5字を配置せしめる。前者は、理趣経でいう三兄弟集会品の曼荼羅に相通するものであり、後者は金剛

第3図 金剛界九会配置順序

は、理趣経の本論に17の文段のあ
 る中の第14段、五部具会の図は第
 16段の経意を文字によつて表現し
 たものであり、更に、他の14種の
 曼荼羅も同様に理趣経本論の文段
 に関係づけてみると、一様に符合
 するから本図の中央部を囲繞する
 十六会は理趣経正分（本論）をそ
 の思想的根拠として結んで差支えない。それらがどのように配
 慮されているかは第2図によつて理解していただきたい。

理趣経が金剛頂経系であることに異論をさしはさむ余地はないが、
 本図各会の展開の順序が九会金剛界曼荼羅と同じように、中央部の下
 ・右・上 左と転回している事は注意しなければならないであろう。
 （第3図参照）

二

本図周縁の種子曼荼羅と同類
 の資料を列挙すれば、

- ① 覚禅抄所載（大正図第4巻）
 - ② 観智院本（大正図第5巻）
 - ③ 曼荼羅集所載（大正図第5巻）
- が知られている。
 その中、資料①には尊名によ
 つてのみ尊位を示す文段 みる

第5図 観智院本 正分第11図

れるが、構造は各会とも資料
 ②・③と同じであり、3者は
 同系統とみなければならぬ。
 さて、それらと本図を比較す
 るならば、次の如き相異のあ
 る事を知るのであらう。
 イ、本図正分9・正分10・
 正分12の曼荼羅についてみれ
 ば、中尊を囲む8尊が円形状

に処理されている事。

- ロ、而して正分9の構造は2重17尊である事。（イ・ロ第4図参照）
- ハ、正分11の諸尊は資料②・③においては中尊に対面しているが、
 本図では行者に向かつている事。（第5図参照）

ニ、正分16の所謂薦福寺金泥曼荼羅における諸尊が極めて少ない事。
 の四点である。

次いで、本図の中心ともいふべき中央部の曼荼羅に視点を合せてみ
 よう（第6図参照）。

尊形輪廓の墨線が殆んど欠失しているため赤外線写真によつても明
 確な事は判明しないが、第2重の4隅および4門の尊は尊像で表現さ
 れている。又、それらの間に配位された卵型状の内部は第6図によつ
 ても像容を表現しているように思われず論外にしてよからう。勿論
 第1重内の諸尊が尊形で描かれている事は第2図によつても明らかで
 ある。つまり、中央部の一会は2重の構造と尊形の17尊を配した曼荼

羅といえるであろう。ではそれらはどのような図様であろうか。

まず、考慮すべき条件は、本図周縁の十六会が理趣経正分十七曼茶羅中の第一会を省いた十六会に相応していることである。従つて、全図が理趣経正分のみの十七曼茶羅の製作を意図しているものとすれば、中央部の曼茶羅は残る正分第一の曼茶羅と解釈すべきが最も妥当である。

又、観点をかえれば、尊数の一致しないのが弱点であるが、理趣経系曼茶羅に於いて独自のあり方を示す理趣経序分の曼茶羅、もしくはそれから展開した3重25尊の布置結構をもつ理趣経曼茶羅とも考えられる。

第3の可能性は「玄秘抄」が愛染王法について「奉_レ懸曼茶羅。十七

「理趣経曼茶羅図」拾遺

第6図 本図中央部（赤外線写真）

尊曼茶羅^{四〇}但中尊愛染王」と記述するものが本図に描写されている場合である。愛染明王は理趣経と極めて関連深い尊格であり、それを中尊に配した理趣会曼茶羅が製作される蓋然性も大きい。

本図中央の曼茶羅について考えられる事は以上の3点に尽きるであろう。

さて、次に第7図の赤外線写真の中尊を検討してみると、腹部の外側には墨線らしきものを殆んど認め得ないし、両肩の輪廓はゆるやかに、わずかながらも垂下するから、それは少くとも愛染明王ではない尊形と推定したい。この意味に於いて、私は第3の可能性をまず否定したいのである。

残るは、第1・2のいずれかにならうが、周囲の十六会を重要視し、第2の可能性の弱点を想起すれば、第1の場合が最も有利とされるであろう。ただし、注意しておきたいことは、現段階においては理趣経正分第一と金剛界理趣会との関連が明確ではないけれども、あるいは

第7図 中央部中尊部分（赤外線写真）
これが思想的に金剛界理趣会の加味された曼茶羅図であるかも知れない。
たとえそうであつても本図にあつては理趣経の正分第一と分離しては存在しないと推測している。

三

理趣経曼荼羅については、諸段それぞれについて図式化しようとする態度と、それらを一に纏めて表現しようとする態度の2つがある。後者の場合には愛染明王・五秘密曼荼羅・理趣経説会曼荼羅・理趣会曼荼羅など多様であつてそれらの背景や展開を究明することはまことに困難な課題である。

一方、前者についてもいろいろな考え方があつたが、前述のように本図は理趣経正分の諸段が意識されて作られた事は明白であるから、一応、前者の範疇に属すべきものと思う。それでは、それら諸段の図式化の思想的根拠は奈辺に存するのであろうか。

まず円仁の「承和五年入唐求法目錄」に記載される「十七壇様 一卷」や、又安然の「八家秘録」で、円仁と宗叡の請来になる事を伝えている「理趣経十八会曼荼羅十八楨」は諸段の図式化にいたる過程を考へるに非常に興味深い記載である。

また、延長3年(925)の書写年記を有し、円珍の蔵書目録と伝えられる「山王院蔵」には「般若理趣経図一卷」が録されているが、これには註記は何もなく、円珍が「般若理趣経図」を「一卷」蒐蔵していた事しか確知できないが、次の如き推測は許されるであらう。

即ち、それは同時に記録されている「金剛頂経初品中六曼荼羅幀幘契印等図略積一帖」の如く、「一帖」として数えられる体裁ではなく、「巻」を単位とするもの、つまり卷子本であつた事が推測される。

あるいはこれに宗叡の請来になると想定して確かな石山寺蔵唐本の「理趣経曼荼羅図」の現存する事実も思いあわせるならば、卷子本で

しかも理趣経の諸段がかなり意識された「理趣経曼荼羅」は疑いなく存在していたといえる。

また、そのような方方は、更に下つて「別尊雜記」巻8の「尊勝曼荼羅図」の註記にみられる「理趣経曼荼乃奥有之」の一文にも見られる。心算であろうとなかろうと、非常に広く種々の図像を集め得た編者の註記を信するならば「理趣経曼荼乃奥有之」の尊勝曼荼羅図は伝承とも考えられるが、とにかく当時存在していた事は肯首される。

そしてこの「理趣経曼荼乃奥」という事は1幅の画像よりも、むしろ卷子本の末尾を示唆しているものと考えられる。

以上、これらによつては理趣経の諸段がどのように意識され、あるいはどのように描写されていたかは明確ではないが、少くとも安貞2年(858)の書写年記をもつ醍醐寺本の尊形理趣経曼荼羅や、貞和5年(925)本のそれ、あるいは、前掲の種子理趣経曼荼羅などはいずれも卷子本であり、注意されるべきである。

とまれ、高野山天徳院蔵「理趣経曼荼羅図」は、諸段が表現されている点では思想的に前述の如き類例を指摘できるけれども、ただ尊形と種子とが結びついている事に関しては、そこに何人かの創意を容認しなければならぬものである。

(清野智海)

〔付記〕

前述の「金剛頂経初品中六曼荼羅幀幘契印等図略積」は、長承元年(1132)に転写された青蓮院蔵「六種曼荼羅略積」(大正図第2巻)の原本的性格をもつものと考えられる。このことは今後五部心観の展開を究明する上には極めて重要な注目すべき事であるが、これについては後日「金剛界曼荼羅の研究」の一節として論述する。